

「きのふはけふの物語」における笑いの性質

深 川 明 子

序

本書における「笑いの発想」については、既に音誠一氏が研究成果を発表（注1）しておられるので、ここでは、「笑いの性質・種類」について分析し、当時の言語生活の一端を知るとともに、本書の笑話の本質・特徴の一部を明らかにしてみたい。なお、分析作業は、神宮文庫蔵、古活字版十行本により、必要に応じて、他本を参考にした。その理由は、金沢大学近世語研究会での底本であったことと、さらに、小高敏郎氏、岡野彦氏の論文（注2）によってもこの神宮文庫本が最適と考えたからである。

麻生磯次氏は、『笑の研究』（注3）の中で、笑いの理論の歴史的な研究成果を分析して、「優越の理論」「卑俗の理論」「不調和の理論」「社会的な理論」に分類しておられる。さらに江戸時代の滑稽文学の中には、以上の他に、「単純な笑い」、「ユーモア」などが存在すると述べておられる。勿論、これらの理論は、平面的な関係にあるのではなく、立場や観点の相違による分類であるから、同じ一つの笑いの現象が、幾つかの理論によって説明することが可能なわけである。

たとえば、しばしば本書でも話題になっている「僧侶の破戒」を例に、説明を試みよう。僧侶階級を何かの形で意識している者たち（僧侶仲間や僧侶階級を特別視している人びとなど）が、或る僧の破戒を話題にした時、既にそこには、その僧への侮蔑的感

情がある。つまり、その僧侶に対する価値の低下現象がそこにみられ、居あわせた人びとは話題になっている僧に対して優越感をいだく。その僧に対する優越意識が、笑いを誘発するわけであり、これが「優越の理論」である。しかし、僧侶または僧侶階級に特別の関心を持っていない人々の集団の場合、破戒を犯した僧、その人自身への関心よりも、破戒という現象それ自体に興味が集中心し、笑いを惹き起こす。つまり、低俗な現象に対する興味を中心となつて、笑いを誘う場合で、これが「卑俗の理論」である。この二つの論理の共通点は、人間の感性に訴えていることである。これを理性で捉え直してみると、「不調和の理論」として、説明が可能になる。つまり、僧侶という社会的に許された身分の人で、戒律の厳しい社会に生活しているはずの人間が、その戒律を破り、卑俗な人間性を暴露するその不調和な現象・不適合な状態が笑いを生む原因であるとして捉えた場合、ここには、その現象を不調和・不適合と認める理性の働きがあると言える。以上のように、一つの現象でも、どの観点や立場に立脚するか、つまり、笑いをどういう理論で考えているかによって捉え方が違ってくるのである。

笑いの理論については、さらに、梅原猛氏も『笑いの構造』（注4）所収の「意味の取り違えの喜劇」の中で、従来の笑いに関する理論を、「コントラストあるいは矛盾の理論」と「優越の理論」に整理しておられる。そこで、氏は、さらに、それぞれの理論の長所・短所を踏まえた歴史的研究成果の上に立って、「価値のコントラストの理論」―価値の高いものと価値の低いものとのコン

トラストによる価値低下現象を笑いの作用と考える理論を提唱しておられる。

さらに、具体的に本書に触れた論文としては、柳田国男氏の「笑の本願」(注5)がある。氏はその中で、笑いの対象について言及され、「文学の形を具へた日本近代の笑話、例へば醒睡笑や『きのふはけふの物語』等に於て、笑はれる客体が何々であるかを見て行くと、時代々々でそれは大よそ定まったものがある。」として、新しいものから順に、①慾深物惜しみ、②知ったか振りりと早合点、無筆と物知らず、③愚か婢・愚か者の親子・愚か村、④だまされる人間の知恵なし、⑤子供・女・壮年男子では臆病者と分類しておられる。

以上、三氏の論文を主として、参考にしながら、本書の笑いの性質を次のように分類して、本書の笑いの性質とその特色を明らかにしてみた。

一、優越感を基盤とする笑い(その一)

笑いの根底にあるものが、優越意識としてまとめられるこのグループでは、主として笑いの対象となっているのは、間抜けで、知ったか振りをする人びとである。そして、多くの場合、笑いの対象となる人物は、生来の愚人ではなくて、たまたま、その時の言語・行為が愚かで、可笑味を誘う話を中心になっている。したがって、優越意識といってもその質は、陰湿なものではなく、その場かぎりの解放された明朗な笑いが多い。人々は、他人ごとのように聞きながら、実は自分の言動でありうるかも知れない話をする場合は客観的に他人と共に、笑うのである。優越感が笑いの基盤として存在するが、笑話の内容それ自体は、無邪気な哄笑が多いのが特色である。麻生磯次氏が、前掲書で、膝栗毛の弥次喜多について、「甚しい不快感を呼びおこす程度のもではなく、且つ人をして自分ならそんな低級なことはいないといふ一種の優越

感を抱かせる為であるといへるのである。つまり軽い程度の醜悪や欠陥を認めること、一方では優越感がおこり、感情的満足が感ぜられることによって笑いがおこるのである。」と述べておられるが、それと同質の種類に類するものと考えてよいと思う。ただし、弥次喜多の場合は、彼らが、「自惚が強く虚栄心が高く、破廉恥な行為を平気とする、道徳的醜さをもっている」が、本書は、短編笑話の性格上、そういう人物のもつ独自の性格までは描写がなく、笑いの対象となっている人物の言動の愚鈍さを笑い、その優越意識の中に、心が解放される種類のものである。

1 愚直な人物の言動を中心とした笑い

上14段。田舎から初めて上洛した人、宿をとり、下人に、宿屋の目印を覚えておけと言う。さて外出の帰りに、宿がわからなくなり下人に問う。下人「たしかに門はしらに、つはきにてかきつけをしてをいたか、みえぬ」と言う。叱られると、「いや、またしるしこそあれ……やねに、とひのとまりたるか、そちや」と言った話である。『日本昔話集成』に「唾の目標」として収録されており、また、『醒睡笑』にも出ている広く流布された話。

上24段。「うつけたるものゝより相、そなたのやねには、ほしさへたくさんにあるか、我らかうへには、ほしもないといふ、何はとあつても、みなぬかほして、やくにたゝぬ、といふた」これもまた、笑話として、広く流布された話である。奇想天外の発想が面白い。またそのばかばかしい会話にあきれる一方、登場人物たちの真面目さが笑いを一層引きだてる。そして、自分は彼らと違うのだという意識が笑いの中に存在する。

下56、57段は、姦通の現場をおさえながら、他へ気を取られて、怒りを忘れてしまっている間抜けな男の話で、下59段は、人の言うままに、女房の鼻を削いでしまった愚直な男が笑いの対象になっている。いずれも、その常識を逸した行為ゆえに、笑いの焦点は、愚鈍で間抜けな男そのものにむけられている。そして、こ

の対象となる男たちには人の良さがあり、憎めない楽しい笑話となっているのが特色である。

2 常識の欠如が中心となる笑い

前記の笑いは、桁はずれの言動のおもしろさが哄笑の対象になっていたが、ここでは、当然常識として誰れもが知っていることを知らなかったために、意味を取り違えたり、勘違いをしたりする人物の言動が中心である。笑話の根底には、常識として当然知っているはずだという共通認識が基盤として存在し、それを知らなかったために、結果的にちぐはぐな愚行を演ずる人物に対する興味が笑いの中心になる。昔話の中にも多く収録されており、愚か村・愚か聲としてまとめられている種類のもの。

上52段。聲入りする男、蟹料理が出たら、まず蟹のふんどしをはずしてから賞味するよう教えられる。勘ちがいして、自分の禪をはずす、聲に従う客皆これに従ったという話で、愚か村の典型的な笑話。他に、上61段は、特技と聞いていた聲殿の太鼓を所望したところ、大肌脱ぎ、髻をとって、南無阿弥陀、／＼と六斎念佛を唱えたので、座中興冷めた話。これも愚か聲の典型と言えよう。

少し笑いの質は異なるが、同じく聲入りを扱ったものに、下58段がある。これは、「鱧鮓」のことを話の行き違いから「与六」と言うと思ひ込んだ山家からの聲が、舅へ手紙で、「なまよろく、少申うけたく候」と書いて寄越したので、舅は返事に案じ暮した話。また、聲には関係ないが、山家の者たちが、「てうすのこ(手水粉)」の意味がわからず、珍問答になってしまう話(上30)もこの類に入れてよいだろう。

常識の欠如が、どういう人物に集中して笑話が構成されているかが、ここでは興味ある問題になる。例に上げたように、多くの場合、それは山奥に住む人物がその対象となる。都の人なら誰れでも知っている鱧鮓や手水粉を知らなかったり、太鼓と言え、六

斎念佛の太鼓を打ち鳴らす無風流な男は、都の人からみればその一つ一つが笑いの対象になったのである。ここには、都会人の田舎者に対する優越感がその根底にあると言えよう。柳田国男氏は、山間僻地という都会からの距離的・心理的遠さが、遠慮のない笑いの対象になったのだと、昔話の愚か村について述べておられるが、この場合も同じことであると言えよう。

3 取り違えが中心となる笑い

われわれの日常生活の中では、取り違え、思い違いから笑いを生ずることは大変多い。そして取り違えたり、思い違いをしたりする原因は、日本語の特徴である、同音異義によることが多いようである。読めば何でもないことが、会話では、往々にして意味を取り違えてしまうことがある。したがって、言語遊戯的要素も加味された笑話が多くなっている。

上4段は、宰相を山椒と音の類似性ゆえに、取り違える笑話で、上5段は、万里小路を「馬での小牛」と思い込んでいた者の話である。どちらも、卑俗なものに取り違えているところが、笑話の焦点で、上5段に「京にもあ中とは、これらをさしてか」と評があるように、教養がないが故に知らずに卑俗なものに取り違えていた愚か者を、田舎者として笑うのである。上7段の「此いし山てらと申は、まへにこすにあり、うしろに山あり、みねにたうあり、たにまたうあり、二わう門あり、これをきく、是はあすかいとの、御寺かといふ、なせに、といへは、何にもかにも、あり／＼とあるほとに」も同傾向の笑話である。しかし、この場合は、必要以上に講釈をつけて縁起を書いている石山寺への皮肉も含まれており、二重の面白さを味わわせてくれる。

上60段は、四国を四石と取り違え、「十石とりになへ、(嫁に)やらぬ」という不便なる父親。上6段は、御門跡を五文の関と取り違え、「三文にまけて、けんふつさせてたまはれ」という遠国の巡礼。いずれも同音異義語の取り違えだが、生活体験範囲の

狭さが、取り違えの要因となっており、笑話の内容にあわせて、笑いの対象となる人物がふさわしく選択されて居ることに注目する必要がある。上48段の、生死を精進と取り違えて、「しやうし一大事は、みそて御座候」と言った沙弥の話もこの類へ入る。

下4段は「御修理」を「み尻」と取り違え、下31段は「召され」を「若衆を召す」という特別の用語と誤解した話。また、上71段は、方言の違いから、手綱を下帯と取り違えた話である。前者は、卑猥な方面へ取り違えをし、後者は、ことばの取り違えから思わぬ結果を引き起こすのだが、いずれも性への連想が、取り違えの面白さの焦点になっている種類の笑話である。

また、上69段、下10段の笑話は、寺内で使用される「すばり」「おにやけ」（ともに男色の意）などの陰語を、若衆とか酒とかと教えられたために、神聖な場所で、真面目に使用する男の話である。意味を取り違えて使用していることへの興味の他に、笑いの対象となる人物が真面目で頑固であることが笑いをより面白くしている。

なお、後にあげた二つのグループは、愚行者に対して持つ優越意識はほとんど潜在的なものとなって、素材としての性への興味がより強い関心となっている笑話と言える。

4 極端な性癖が中心となる笑い

下61段、博突で丸裸になった二人が、辻堂の縁の下で、この分なら死ぬばかりだと、後悔し、二度と博突を打つまいと言う。一人はそこにいた犬で体を温めていたが、その犬を貸す、貸さないで、口論し、「さらはさいかある、それをかけに、一はんまいらう」と言った話。また、下11段は、値ざしの癖を意見された若衆が、まことに過分な意見だ、今後は随分たしなみ申そうと言いつながらずぐその後で、「まことに／＼、このやうなる、かたしけない御いけんは、百くわんでも、かはれまい」とことばが口をついて出た話である。

下30段は、巡礼と鉢開きの寝物語である。巡礼「せめててんかを、三日しりたい、さあらは、国々のつちたうのいたしきを、たか／＼とつくらせ、あんのしたにて、其方たちとはなしたい」と。鉢開きそれを聞いて馬鹿にして笑う。そして「われらは京の国を、一日なり共しりたい、なせに、まち中のいぬを、みなうちころさせて、ゆる／＼と、はちをひらきたい」と言った話。

これらは、習い性となった癖や、境遇から抜け出せない考え方が、笑いの対象となるものである。下29段は、泥棒に槍をもって構えながら、入って来た時にうろたえて「やりをは、其まゝしたにをいて、口にて、くつさり、といふた」男の話で、臆病でおつちよこちよいの性格が笑いの種になっているが、これも、この中へ入れてよいだろう。

以上述べてきたものは、知らないが故に不用意に犯す失敗が中心であった。したがって、その笑いは、失敗に対する単純な笑いが中心となっていた。笑いの対象となる人物は、奇想天外なことを言ったり、したりする愚か者であったり、全く物を知らない山奥の田舎者であったり、教養が低いために取り違えばかりしている人たちで、その愚かしい言動が笑いを誘発する。そしてその根底には、自分ならあのようなことはしないという意識——優越感が存在していた。したがって、生来の頑固な性癖の持ち主なども、その癖が人並み外れている故に、常人の感覚からは笑いの対象となった。そして、その笑いは、極端さに対する笑いで、自分との比較は潜在意識としてのみ存在する邪気のない、単純な軽い笑いと言えよう。

優越感に基盤を置く笑い（その二）

1 知ったか振りが中心となる笑い
これは、知らないことを知ったか振りをして、もっともらしい

説明や屁屈をこねる。その屁理屈が興味の焦点になる。そして、この笑いの前提となる基盤としては、それが単なる屁理屈にすぎないということをつまみ、真実を知っていることを前提とする。屁理屈と認定できる能力が、そのまま屁理屈を言う者に対する優越感となつてゐる。

上13段は、竹の子が竹になる話を聞いて、「あの松たけなども、むさどくうは、をしひ事ちや、二三十年したらは、大木にならうに」ともつともらしい顔をして言った話。下38段は、山より出て来た者が、飛んできた鰻頭をみて、天人の玉子と言って、温める。やがて青かびが生えたので、むくりこくりの玉子であろう、殺せとて射切る。そして、「されはこそ、申さぬか、中に、くろちのかたまりがある」と最後まで、事実気づかずもつともらしい理屈をこねている話である。知らないことを知ったか振りを言う面白さと同時に、屁理屈の着想が面白い。そして、笑いの基盤には馬鹿げたことを言っていると思う余裕ある態度が、その根底に優越感として存在していると言える。同じくこの中へ入る話としては、上44段、57段がある。下27段は、蹴鞠が道路へ落ちたのを遠国の侍が、突く。主人がそれを見て、「人のかひとり」とみえて、とやまてしてあるに、ころすまいものを」と言った話。下38段と同様、遠国の田舎者が笑いの対象となっており、そのもつともらしい屁理屈にも共通点を認めることができる。

2 生半可な理解の知ったか振り

上9段は、長老さまが、お茶を「もみちにたてゝまいらせよ」と言うので、何事かと不審すると「こうよう」（濃く良くと紅葉を意味する）という意味だと教えられる。誰か来たら一つ試してみようと心待ちにしている所へ客が来たのでまねる。客に「もみじ」の意を問われて、「こくよく」と答えてしまった話。「こうよう」でないと「もみじ」が意味をなさず、面白みがなくなってしまう。

上10段も、同じ趣向である。孝行風呂の由来を、「ふかふ（不幸・吹かふ）におよはぬ」という意味と教えられた男が、他所で「ふくにもおよはぬ」と言つてしまい、座中の人、興味を喪失してしまつた話。

また、上39段は、ある日蓮宗の信者が、大徳寺三玄院の国師に「せひとも法花衆に、御なり候て、きやうをいたゝかせられ候は、我らにおいて、へつして、まんそく仕り候」と言つた話。国師号を賜る程の高僧へ、もつともらしい言い方が滑稽で、まさに釈迦に説法である。これも、生半可な知識を持つて知ったか振りをする者の滑稽さと考えてよいだろう。

3 文盲の知ったか振り

文盲が、知ったか振りをして、検討はずれのことを言う。知ったか振りをしている内容について、一般的教養として聞き手はその知識を持つていゝことが必要となる。今までは、ほとんど日常生活の常識の範囲を出なかつたが、これは、やや知的理解がその前提として必要であるだけに、それを知らない笑いの対象となる人物に対してつ優越感は大きく、明瞭になってくる。

上53段は、誓願寺の南無阿弥陀仏の額をみて、「さてもみ事な、しゆせきかな、かひたりや、せいの字、くはんの字の、ひつせいは、たふん、すかうか石すりてあらふ」と言つた話。字も読めず、石摺りがどんなものであるかも知らないで、大仰なほめ方をしたのが滑稽である。

上78段も同趣向の笑話である。ある人春画を買うのに「もし文字の、ちかいたる事があらは、かへさうそ」と言うのと、売り手も「これは、ようほう寺の上人、せいわう坊の、けうかうなされた程に……」と答えている話。春画に文字など問題になるはずもなく、また、学僧世雄坊が春画の校合などする筈もないのに、お互に知ったか振りをしてもつともらしく言い合つてゐるところが面白い。

下5段は、文盲が、すばらしい古筆を何故勅筆と申さぬのかと不審がる話である。勅筆を珍重があるので、すばらしいものを勅筆と言うと思っていた文盲が笑いの対象だが、話としては、可笑味は少ない。

以上は、文字に関した笑話だが、同質とみてよいものに、連歌や能などの教養を下地としたものがある。

上18段は、ある人、連歌の会で、「のゝみやの、森のこからし、秋ふけぬ」と秋の前句に付けた。「ぬ」を抜かすと謡曲の文句そのままなので、それとなく、「ぬとまりか、ならぬ」と言ったところ、「秋ふけて」と一字の違いもなく謡曲の文句そのままを付けたという話で、連歌や謡曲についての一応の教養が、笑話の理解に必要なっている。

上54段は、同じく能についての教養が土台となっている笑話。日吉能で隅田川を鰻で芝居中が泣いた話を聞いたある人が、翌日早速出かけ、三番叟の時に泣く。何故にと問うと「あのすみたかはか、あはれにて、物もいはれぬ」と言った話。これは、まだ隅田川にならない祝物の三番叟の時に、早くもわかったような顔をして泣き出した面白さと、三番叟は黒色の面を付けて演ずるので、「墨だ顔」と掛けた言語遊戯の面白さを含む高級な笑話である。しかしながら、このような、連歌や謡曲の特殊な教養が笑いの素地として必要な笑話は全体的には少ない。高い教養が笑いの基盤として要求されればされるほど、それを知らないでへまをする人物への優越意識が明瞭になるわけだが、そういう種類の笑話は比較的少ない。

以上、「優越感に基盤を置く笑い（その二）」として、挙げたものは、（その一）に比較して、知性・教養が前提条件となっている種類の笑話として分類してみた。しかし、「1、知ったか振り」「2、生半可な理解」の項では、取り立てて、知性とか教養という必要もない程度のものである。「3、文盲の知ったか振り」

が、もっとも適切なものであるが、それは全体的割合から言うとき少ない。したがって、優越感に基盤を置く笑いの本書の特色は、謂ゆる教養・知性を持った人物が、無教養者を笑いにし、優越感を満足させる種類のものではなくて、愚行者への軽い、単純な笑いが中心であると言える。つまりここに表われている優越感は、知的教養に狭く限定されるものではなくて、もっと巾の広いものである。そして、その笑いは、素朴で、明るく、邪気のない健康な笑いであると言える。

二、価値のコントラストを基盤とする笑い

本書には、僧籍を有するもの、あるいはそれに準ずるものが、非常に多く登場してくる。本書に先行して刊行され、本書と類話を多数持つ『戲言養氣集』や『醒睡笑』にも同じことは言えるのだが、本書以後刊行された笑話本『鹿の巻筆』や『軽口露がはなし』には、ほとんど僧侶が登場してこないことは、笑話本の系譜を考える上で一つの注目すべき事実である。

僧籍に身を置く人たちは、特殊階級として一般人からは、特別視され、総体としては有識階級として一目置かれていた。したがって、笑話として扱われる時には、そのことが前提条件となっており、一般人なら問題にならないことが、僧籍にある者の行為ということとで揶揄されることになるのである。つまり、一目置かれている存在者が、卑俗な行為をするという設定には、そこに価値のコントラストが意識されており、価値のバランスの崩れがみられる。そしてそこに笑いが生ずるのである。また、バランスの崩れは特別視されている人間の価値と權威の低下現象を引き起こす結果ともなる。

1の1 破戒（不殺生戒）

上28段。旦那が見事な雁の毛をむしっている長老の所へ行く。長老うろたえて、毛を枕に入れるためと言いつつ、「これは何と

りそ」と鳥の名も知らないことを装って尋ねる。旦那、むしった毛を長老の前へ押しやり、鳥の方は必要ないようだからと自分の袋へ入れて、「是は、かん(雁)にて候、たゞし、かやうにしてから、をしとり(押し取り)とも申」と言って持って帰った話である。「をしとり」という言語遊戯の要素が加わった面白さと共に、呆然としている長老の姿が相像されて傑作の一つであろう。同じく殺生戒を犯した話としては、上49段がある。これは御坊が見事な鯉を料理しているところが露見して、肝を潰し、うろたえて、「此こいは、なんといふうをて御さある」と言った話である。他本にもこれに類する話は多く、大東急文庫本の上26段は、長老が月夜に泥鰌を獲っているところを咎められたので、うろたえて、「正真の俗人じや」と答えた話である。また、上45段は、鮑料理中客が来て仰天し、此の貝は目薬と聞いていたが目のどこにさすかと恍けると、酢に塩の入れた腸をいやという程さされて五体を投げてわめき騒いでいる間、客は鮑を皆賞翫して、自分には口からさしたのが相応うたと言って帰った話で、いろいろと興味のあ

るものが多い。不殺生戒のみならず、不邪淫戒も犯してうろたえているのが、上29段や上50段である。前者は、長老の衣の裾から鯉が付いていたので、慌てふためき、是は女共が、薬にすると云って求めたと、つい口がすべってしまった話で、後者は、長老が鮑料理中、人の訪問をうけ、うろたえて、女達の責任に転嫁した話。いずれも、殺生が露見して、うろたえた為に、邪淫戒までも犯していることがわかってしまった話である。

以上挙げた笑話は、現象的には、僧侶の破戒が露見したため、うろたえるさまが中心になっている。そして単なるうろたえだけでなく、僧の無念さを尻目に、得々としている旦那衆の姿や、うろたえたために失言して、さらに他の戒律を破っていることが発覚する僧の話など、笑いの焦点を二重にする構成上の工夫がされ

て、可笑味を深くしている。しかし、これらの笑話が笑話として面白いのは、表向きのたてまえとしての僧の姿が固定されたものとして存在している事実が前提にあり、その僧が現実にはそうではなかったその食い違いに興味があるからであろう。つまり、価値のコントラストにあるといえるのだが、これらの笑話はさらに、登場してくる僧侶が全て「長老」と言われる人たちであることが可笑味を深くする原因でもある。価値のコントラストは、その価値の落差が大きい程笑いも大きくなる。そして、ここに登場する長老たちは、揶揄され、嘲笑を受けるわけだが、そういう扱い方の中に、価値あるもの、権威あるものを引きずり落す、価値低下の現象がみられることも注目しておきたい。

1の2 破戒(不邪淫戒)

前節の殺生戒を中心として破戒が、僧のうろたえを中心とし、そこに価値の低下現象が見られたのに対して、邪淫戒の破戒を中心とした笑話には、やや異なった傾向がみられる。

下47段は、長老が参詣に来た女房を眼藏へ引き入れてしまふ。そして、御遺言によって毎月御参詣あれと言え、女房も、齋非時は勿論、布施も今のやと言った話で、図々しい二人の言い分が面白い。下37段、下55段も同じような不邪淫戒を犯す僧のふてぶてしさ、図々しさが興味を惹く。これらの笑話には、慌て騒ぐ僧の姿はなく、もっと図太い、居直った僧の姿がある。戒律に厳しく縛られた存在でありながら、人間の本能を剥き出しにした行為との対象なコントラストの面白さと言えよう。

また、上31段・下39段は、意外性に笑いの焦点がある。前者は光源院が御意に入られたある上人に、実は16才の時設けた子供がいた話であり、後者は、ある長老が悪い、最後と思われる時、弟子どもが酒を枕もとに置いて、「目をひらきて、御らん候へ、いつもの御すきの物にて候」と言ったところ、「へゝか、と申された」という話である。意外なことばに意表を突かれ、笑いが生じ

るのだが、これも、精進潔斎の身にある僧と現実の行為のコントラストが笑いの中心をなす。そして、その人物が、この場合は人から尊敬を受けていた高德の僧であったことが、価値の対比を大きくし、意外性を高めて、笑いを面白くしていると言えよう。ここには、コントラストの面白さのみで、前項でみた価値低下の現象はみられない。

2 金銭・飲食への執着

前節の「破戒」では、対象となる人物に関して言えば、みな僧侶であった。そして、その破戒の内容は、殺生・邪淫・食肉が対象になっていた。それに対して、稚児が登場してくる笑話は、飲酒・食食に関したものが多く、

下24段は、稚児が餅を食べ過ぎて熱を出す。お腹が楽になるように薬をやるうと言うと、「くすりやゆか、口へいるほとならは、また一つも、もちをこそ、くはふすれ」と言った話。上67段は、若衆、餅が咽につまる。祈祷師を呼び、祈祷すると二間程先へ餅が飛び出した。皆天下一の名人と誉めると、「あつたらうまい物を、内へいるやうにしてこそ、天下二でもない」と言った話である。また、上66段は、餅に種があったら「うへならへて、花見してあそひたい」とあるが、『醒睡笑』には「うへてをきてならせてくひたい」とあり、この方が面白い。

以上、餅に関した笑話を挙げたが、食物に深く執着している稚児たちの姿が、いろいろな角度から捉えられている。稚児たちの返答が意表をつくものであり、それが笑話の面白さの焦点となっている。

下25段は、稚児が小法師の昼飯も食べてしまい、問うと「まことに、おしるかと思ふて、あこかめしに、うちかけてくふた」とぬけぬけと答えた話で、下26段は、九つを打ったならお昼を召し上がれと言ったところ、はや四つ時分に食べてしまった。尋ねると、「けさいつ」と、今四つとは、九つてなひか」と答えた話で

ある。下54段は、花見に、美しい箸を一膳腰に差して出かける。後見の法師が咎めると、「そなたの、なにと御にらみ候ても、あこかゝるに、よしみつのわきさしより、たのもしひ」と言った話。以上は、食事に関する笑話だが、笑の性質においては、餅の項で述べたと同じことが言えよう。

上47段は、乳房に酒を塗らねば、乳にも飲みつかなかった酒好きの稚児の話。上62段は、朝から酒ばかりを飲んで赤い顔をしている若衆の話で、飲酒に関するものである。

僧籍に身を置く者としては、一応俗界の欲望から超越していることが前提となる、稚児も寺住の身であれば、その中へ入るわけではあるが、それが俗人以上に飲食に執着している姿が捉えられてそのコントラストの面白さが笑いの基盤にある。また、この場合は、僧籍にある稚児というよりは、「おちごさま」と敬称が使用されている笑話が多いことから、美しく、上品であるべき筋の稚児という前提があり、それが人並み以上に、飲食に執しているというコントラストでもあるのである。そして、この場合も、価値の低下現象は見られず、笑いの基盤となっているものはコントラストのみである。

稚児の飲食への執着には、さらに言語遊戯が加わったものがある。上41段は、「二度もの思」という題で歌を詠むのだが、小稚子の歌「朝めしと、又夕めしに、はつれしと、日に二たひわ、ものをこそおもへ」これは、稚児という身分と食事への執心の対比の面白さのみならず、和歌という伝統的な文学形態に、このような内容を詠むことのコントラストの面白さがある。上42段は、三個撥音を入れて田楽を賞味する。雲林院、混元丹、南蛮人などと皆が言う中で、一つも言えない稚子「ちやうんすん」と出鱈目を言って五、六個ひたくり取って食べた話である。下23段は「法印様は御留守か、いやちふつたうでかきして御さる、かきとは何事ぞ、ひたるさに、かんともきんとも、はねられてこそ」という笑

話。空腹で、看經(かんきん)の擬音が発音出来ないという大袈裟な話でいずれも言語遊戯が素材と合って面白い笑話となっている。

3 恋と物欲のコントラスト

稚児が男色の対象になっている笑話も多い。僧籍にあるもの同志が、性の関心から抜出せず、しかも一応、恋仲という精神的関係にありながら、物欲が本性剥き出しになっている。そのコントラストの面白味が、基盤にある笑話の類。

下48段、お稚子様へ正月の遊び玩具として、金、銀で作った玉ぶりくを送る。稚子見て、美しいが重くて振られぬ、とて捨てる。「それはおしや、とこへ」「めんさう(眼藏)のまん中へ」という笑話。下62段は、念者がお稚子様へ贈り物をしたいという見せるが気に入らない。やっとな硯ということになり、そぎつきに銀と金で雀を作ろうと思つて、その大きさを稚子に尋ねると、梟程なのが良いと答えた話。いずれも、稚児が一見物欲に執着していない振りを装いながら、本音が出ているところが笑いの焦点。下19段は、高野聖が若衆に惚れ、口説く。若衆つれなく、返事もないので、重ねて言う。「まい年二きに、心つけをいたさうか、それでもいやか」と。吝嗇で、無粋な口説き方が面白い。

上68段は、若衆が、念者と寝て、身を睡で濡らし、大きな鬘斗付を貰い、いらぬと言つて返すのに汗をかいたと言つて鬘斗付けを催促する。念者これを聞き、春の夢は合わぬものじゃ、安心せよ。と言つた話で、虚々実々の二人の駆け引きが面白い。

以上、いずれも、恋仲という精神状態に高い価値を置き、現実には物欲が剥き出しになった本性に低い価値を考へて、その価値のコントラストが笑いの基盤を作っている部類である。前節の、飲酒、食食に執着している部類とその基盤となるものは同質である。

4 性器・屁を対象とした笑話

僧侶の性に関する笑話が、かなり多数あることから、その乱れ

は相当なものであっただろうが、表向きには無関係であるべきはずのものという概念が以前として強く存在していたと思われる。したがって、性に関する話には僧侶が多く登場し、いわゆる笑話として成立する要因はそこにあるのだが、性器に関する話もその例外ではない。今まで、繰り返し述べたように、この部類も性欲などから超越した存在であるはずの僧(高い価値)と現実には性に執着している僧(低い価値)とのコントラストが笑いの基盤としてある。

上55段は、稚子の里が不如意で、何もかも借りものの中に、陰茎だけが借りものでないと人が言うのを聞いて、稚子「しちもおれのではないけな」「なせに」「見るものことに、馬のものをちやといふて、手をうつほとに」と言つた話。下12段は、おにやけのはりかたをへゝの味にして欲しいと言つた山寺の僧の話である。

下32段と下49段は、性器を素材にしているが、笑いの焦点は、単に性器のみに向けられていない。前者は、上臈衆の求めに応じて長老が、女人成仏の法を説く。「第一をんなは、つひふかふして」の所で、皆笑い出す。「罪深うして」が「つひ深うして」を連想させたからである。長老は「みな、きのやりやうか、はやうてわるい。」と言つたという話。下49段は、彼岸の参詣に来た上臈衆に貞安が談義しようと思ひ、「上らう衆は、なかいやすきか、みしかひかよいか」と談義について尋ねたところ、女房共一斉に笑い出す。男の持物を連想したからである。貞安ぎつと睨んで、「それは、みな、きのやりやうか、わるい」と言つた話。両話とも、長老の生真面な態度とその口から出ることばが、およそ不似合なものを連想させるそのコントラストが笑の基盤となつて成立している。

言語遊戯が加わつた笑話には、下16段がある。法師たちが若衆の姿を見て、「御かたちは天下一、おにやけは、しゅこふ入ちや」と言うのを聞いた新発意「さいく、ふひやう(夫微・不淨)か

出るほとに」守護不入ではないと言った話で、掛け詞が効いている。

笑話の中には、屁が題材に取り上げられているものも多い。下17段は若衆がおならをして念者に、馴染みの間故不調法が許されることはありがたいことだと言う。念者、そのように私を親しい者と思つて下さることは未来永劫に忘れ難いと言ひも果てぬうちにまたおとした。念者、鼻を塞ぎ、「かさね／＼くはふんな」と言つた話。下18段は、若衆がやはり不調法をした。句を山王祭にことよせて、拍子を踏んで紛らしたところ、念者「うけたまはりおよひたるより、よきひやうしちや、さりながら、まねさへ、これはとくさひに、ほんのは、あたりへよられまい」と言つた話。題材の特異性もあるが、ユーモラスな笑話が多い。これらは、男色の相手としての美童が、下品な不調法をやらかすそのコントラストの興味が笑いの基盤としてある。

以上、価値のコントラストが笑いの基盤となっている笑話を挙げてきた。価値のコントラストが基盤となる笑いには、高い価値や権威が引き下げられる現象（価値の低下現象）が起ることが多いのだが、本書には、「破戒」の一部に長老の権威が引きずりおろされていた現象が見られただけで、ほとんどが単にコントラストの面白さであった。コントラストを基盤にして、登場人物の特殊な立場を生かした笑話が中心となつてゐたといえよう。したがつて、その笑いの性質は、明るく、単純で、素朴な笑いであると言える。

三、ユーモアのある笑い

1の1 ユーモアのある言動・機智を賞讃する笑い

機智に富んだ、ユーモラスな応答が賞讃されている笑話の類。上35段。経を読み、学問せよと言つても全然聞き入れない子供のことを上人がお聞きになつて「きやうをよまぬは、大事でもな

い、よきはつけ衆の下地ちや、あとをゆつらふ、ちやうかこはふて、きのくすりちや」と言つた話。日蓮宗徒の強情が世評に喧しかった事が、うまく利用されている。上56段、信長が、小稚子は利口で大稚子は鈍なのは何故かと尋ねる。天竜寺の策彦和尚は、小稚子はまだ寺に慣れない為、武家の利発、才覚が身に付いており、大稚子は寺染みて、緩い立振舞を見慣れて自然と心おとりがすると申したので、信長一段とご満足であつたという話。策彦和尚が信長の側近として、時にはお伽衆的な役割も果たしたものとと思われる。その場に應じた巧みな返答が興味を惹く。

下21段は、ある男、女房を離縁し、何でも好きな物を持つていけと言う。女房「われらのほしき物は、これよとて、五六すんなる物を、ひんにきりとつて、かへらふ」と言う。男是非なく、それから五百八十年契つた話。「女にも、かやうに、ちゑのふかふて、やさしきものゝありとて、みんなかんしける」の評が付いている。整版（寛永13年版）下69段にも似た話がある。ある男、女房を追い出す。女房が嫁入の時の衣裳を取り出し、化粧した姿を見て、男は離縁を言い渡したことを後悔する。そこで、河を渡る船を自分で出して、対岸に着いた時、船賃を出せと言う。女房、夫婦の間で船賃には及ぶまいと言うと「それは、ふうふのときのこと、もはや、いとまをいだしてからは、他人じやほとに、ふなちんがすまふは、いなせまい、もどれ」と連れて帰り、五百八十年添うた話。両話とも明るい微笑えましい話である。この種の話は、情景描写も具象的で、庶民の感情の機微が伺えて面白い。

1の2 悪態や狡智に興味を置く笑い

下6段は、ある出家が、子を拾つて育てる。余りの悪行に叱ると、代官所で双方の理否の決着をつけようと言う。代官所で悪童の言うには「先やしなひそたて、人になしたる、なととて、得こなる事を、申され候、それかし、馬の子か、うしの子でも候を、

人になされ候はは、をんともそんなすへけれ、そうへつはしめから、人の子にて候程におんともそんなぬ、其うへ、なられもせぬ、つえにせう、はしらにせうと申され、何よりもつて、めいわくに候」と言う調子で、経は習ったが一字も覚えておらぬから、返したも同然で、また、寺を譲ると言っても、生前に譲るのならともかく、死後は自分の他に譲るべき人がいないから当然のことである。何か師匠に道理がありましようかと言ったので、奉行衆もあきれて返答も出来なかった話だが、その常識を遙かに逸した言い訳が、興味の中心。悪童ものの典型である。

下60段は、ある夫婦、昼ごとをするに、子どもが来て覗くので、鬼の面をかけてする。子ども走り出て友達を呼ぶ。「千松も、とら千代もみなおちや、物見せう、おれか所のなんとに、おにかほとす、みせう」。整版(寛永13年版)上77段には、ある夫婦、屋儀を企てんと、子どもを川へ金輪洗いにやる。子どもはすぐ帰って来る。「よそにも、ひるつびがはやるやら、川に、かなわあらひがつかへて、あらはれぬほとに、かへりた」と言う話がある。これらもまた、悪童物の一つの典型である。子どもが笑話の主人公たるには、大人と対等の立場に立つ必要があった。それには悪童という形式が最も適当であったのである。前者は、意表を突く返答で、完全に大人を遣り込めており、後者は、性の可笑味を充分生かしながら、大人を愚弄していると言える。一瞬、晒然とさせられる子どもの悪態にユーモアを見だし、それを興味あることとして認め、笑い態度が本書の姿勢の中に見られる。

上11段は、俄分限者の話である。今焼きの壺に手をつ込んで抜けなくなった人に、千貫と値を吹っ掛ける。やっと五百貫に値切って店を出ようとすると格子戸に引っかかって出れない。格子戸も百貫で売り、今長者となったという。これは、人の難儀をみて、それを悪用しての商法なのだが、それに対する批判的調子はない。悪童ものの場合と同様、その悪行を否定的に評価するので

なく、そういう事実に限らない興味を示し、笑いの種にしている。常識的な道德観から脱却した、粗野だが生々とした人間像が取り上げられていることも、笑いの性質と共に本書の特色として注目して置きたいことである。

2 日常生活における風習とことばに関する笑い

上19段。転宅を祝う連歌の会で「春の日や、のきはにつきて、めくるらん」(火が軒端に着火する意にもなる)としたので、宗匠が何とか直らないかと言うと、「はやまつくろに、すみになりたる」(下手なので何回も書き損い、懷紙が墨で真黒になったの意だが、焼けて炭になった意に通じる)と言う。宗匠「たひしか、またわきにつけうまでよ」(大した事はない、訂正の紙を脇に付けるまでよ、の意だが、わき隣家に火をつけるの意に通じる)と、つい宗匠までが、つられて禁句を口にしたという話。

下53段。ある人子を設けて、芽出度いことと喜ぶところへ、隣の老母来る。縁が高く、上がりかねて「これのは、こゑんかなふて、あかられてこそ」(子供の縁がなくて、成育しないの意に通じる)と言った話。

上45段、物忌みする人、元日の若水を迎える為の呪文を下人に教える。下人忘れて案じているのをみて、腹をたて枕を投げる。下人「人の物思ふ所へ、なげきをなさるゝ」(物思ふは考えるの他に愁に沈む意があり、なげきは投げ木、当時は木の枕が普通、と歎きに通じる)と言った話。上46段も同じく、下人が登場し、失敗する話である。ある人、下人に元日の物忌の作法を教え、決して「ちやをたてた(仏事をするという意味があるので忌む)な」といふな、おふく御いはひ候へ、と申せ」と懇に言う。下人忘れて「おちやたうか、はきましたか、おまくらあからぬか」と言った話。(茶が湧いたが、まだお起きになりませんかの意だが、お茶湯と「お」を付けると、仏前の茶の湯の意になり、枕が上がらぬは、重病の為起き上がれないという意に通じる)

芽出度い行事の時につい忌みことばが口をついて出るおもしろさであり、後者の二話は、物忌みする人が折角下人に言いふくめたにもかかわらず、それが失敗に帰すことの興味である。このような縁起をかつぐ生活習慣が、かなり浸透していたことを示すと共に、そのことに鋭敏だった当時の風習を反映している。しかし、後者の二話は、余りに極端な人物を揶揄する態度が見られ、縁起をかつぐことに捉われ過ぎて人物を笑いの種にしている点は、本書の性格を考える時、注意しておきたい一点である。なお、この種の笑話は、掛けことばを中心とする言語遊戯が興味の基盤となっていることは、言うまでもない。物忌みの風習を言語遊戯と編めて笑話とする方法は『鹿の巻筆』など、後の笑話本では大きな比重を占めることになる。

3の1 和歌（人名詠み込み）に関する笑い

本書には、和歌が笑話の題材となっているものが多い。和歌それ自体が興味の焦点となっているものを「3」として取り上げてみた。最初に問題とした、人名が、詠み込まれているものは、言うまでもなく人口に膾炙された有名人が、その人物に似つかわしく巧みに詠みこまれた点に興味の焦点があり、それに喝采する種類の笑話である。

上15段。平素は足打折敷のところ、句会の日だけは公卿衝重が出るので、不断光院は、近衛大閤に、平素も公卿をと所望したところ、太閤の歌「くきやうをはとき／＼なりとすはれかし、ふたんくはふはいはれさりけり」（公卿衝重の膳に時々なりとも据わりなさい。普段食おうと不断光院は云われなかった）とその所望を退けた。

下2段は、今井殿の娘が、春日殿へ嫁に行ったが、翌日送りかえされたので、市川肥前守の歌「すゑとけて、とてもいまる（居まい・今井）の、むすめこに、一夜のやとも、かすか（貸す・春日）とんなり」

下14段。閑松大夫が、能の熊野を為損じたので、「むねもりの、さこそむねんに、おほすらん、かんまつたゆうに、ゆや（能の三番目物熊野と宗盛の美妾熊野）をしられて」

同じくこの類に入れて良いと思われるものに、地名を詠み込んだ歌（上16段）がある。近衛殿が、秀吉に流されたのを悲しんで詠んだ歌「大臣のくるまにわあらて、あわれにも、のするかこしま、になふはうの津」（近衛の大臣が、配所へ向うに、車ではなく、哀れにも駕に乗って鹿児島島の坊の津へ、棒に荷われて行かれたことだ）がその代表例である。

3の2 古歌もじりの和歌

古歌をもじって詠んだ歌に興味がある笑話・和歌に詠まれた風雅と対象的な卑俗な事象が詠まれ、そのコントラストが笑いの底流にある。

下1段。人夫どもが、築地の周囲の植え木の枝に、面桶をびっしりと掛けたのをみて、「見わたせば、やなぎさくらに、こき（槐）かけて、みやこわはるの、こしき（米を蒸す器、また、乞食にも通じる）なりけり」と詠んだ。これは、素性法師の歌で、古今集以後いろいろと引用される歌「見渡せば柳桜をこきまげて都ぞ春の錦なりける」を踏まえている。他に、古活字八行本下44段に、有人、酒を送るとて、遠くから送る好意を恩着せがましく言うので、返事に、遠来の酒だから唐土から安倍仲磨が奈良を想い詠んだ歌「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」を引用して「あまの酒（天野酒は当時珍重された）ふりさけみれば（振ってみるとの意に通じる）かすかある（少し）みかさ（三盃をかける）ものまはやかてつきなん」と悪口を言った話。技巧的な面白さは絶品である。他本にも、この種に類するものは、それぞれ興味あるものが多い。人口に膾炙された和歌ではあるが、下地となる歌を知っているという事実は、知的感情が満足させられ、したがって、そのもじりのうまさに喝采を送ることになる。

3の3 掛けことばを利用した機智あふれる和歌、その他の笑話

以上の他にも、機智や頓智を利用した興味ある和歌が中心となっている笑話が多い。ここではそれらをまとめて、個別的に例話を挙げておきたいと思う。

上21段。定家の弟晁月坊、定家へ、「けうくはつか、しはすのはての、そらいんし、としうちこさん、石ひとつたへ」（手元不如意の折、せめてあてなしにでも空礫を打って、石に当てて年を越したいと思う。どうか石を一つ下さい。石は米一石を掛けている。）返し「さたいゑか、ちからのほとを、見せんとて、いしをふたつに、わりてこそやれ」と、米五斗添えて送った。和歌の機智ある応答が興味を惹く。下33段は、公方様が持仏堂へ御参詣に行かれた折阿弥陀の名号が落ちたので、しゅん阿弥が掛けたところ又落ちた。そこで公方様は「かちはらと、しゅんあみたふか二度のかけ（駆けと掛け）それはかうみやう、これはみやうかう」と詠んだ。功名と名号の語呂合わせの言語戯遊が機智に富む。

上23段は、同音読み込みの技巧を生かした和歌である。法華衆の一致派と勝負派が教理論争をして、勝負がつかない。遂に畢丸をしめられて難儀するのを見て、門に落書、「ほけきやうの、そのしやうれつ（勝負派と勝負）は、しらねとも、きんをしむるは、いつち（一致派と非常にの意）めいわく」。場面の状況がよく生かされた歌が面白い。

上63段は、ある若衆を貧僧と大名とが競争をする。貧僧負けて「何事も、人にまけしと、おもへとも、こかねかたな（金と黄金造りの太刀をかける）て、手をそつきぬる（手を突いてあやまると手を突き傷つけるの意）」。貧僧の精根尽きた様と、財力ある大名への恨みがましい態度がよく出ており興味深い。

下43段は、ある比丘尼寺、「南無」の二字を額に打ったので、二字寺と言う。尼達麻糸を売る。近くに東妙寺あり。坊主達糸買

にことよせて、たびたび二字寺へ赴くので、やがて門に落書、「二字寺も、いまは六字に、なりにけり、とうみやうしより、しち（阿弥陀佛の四字と陰茎をかける）をいれるは」。掛け詞の内容のコントラストが面白い。

下40段は、ある人歌を詠んで贈る「きみをのみ、こひこかれつる、手すきみに、かと田にいて、ねせりをそつむ」。喝色この歌を得て、返歌を相談する。歌の作法は、詩・連句と同じ心であると言われて、では容易なことと思ひ詠む。「われしらみ、ふなあふりさき、あしもちり、せとのはたけて、こはうひきぬく」と。きみをのみにわれしらみ、こひこがれつるにふなあふりさきと、一句ずつ対句にしてしまったのである。一首は全く意味をなさないうが、ことばの対置に興味があり、面白い笑話となっている。

以上、和歌それ自体が興味の中心となっている笑話は、いろいろとその内容が千差万別で種類も多い。機智に富んだユーモアある和歌にその知的センスを満喫している人々の層がかなり厚かったことが伺える。

4 言語戯遊その他

上43段は、秀句で田楽を賞翫する。「大ちこ きよもりの長刀 いくくしま（鰐島・五串）。しんほち 佛のつふり みくし（御髪・三串）。小ちこ いしやのほんそん 八くし（薬師・八串）」。

謎の要素を持つ言語戯遊である。

上36段は、無理問答形式の言語戯遊によるもので、「かふつけ、下野あつて、中つけなきはいかに、ちくせん、ちくこあつて、ちく中なきかことし」。

上8段は、掛け詞が会話の中で巧みに生かされた笑話である。掛け詞の一方の意味が、卑俗なものである時は笑話としてよく取り上げられているが、これもその例である。有人、奉公したいという小者に、今までどこに居たと尋ねる。「おならやにいました」「おならやとわ、人をなふるか」「ゐ所（居所・尻の意味）を御

たつね候程に、申事ぢや」。

下44段は、ある人、糸柳を秘蔵して植えおく。案内なしに掘って取っていく者がいるので、咎めると「やなきは、見とりぢや（緑・見取り）」と言う。無念さに、鼻柱へ一揷くわして血を流さす。何事と怒るところを「はな（鼻・花）はくれなるよ（紅・呉れない）」と言い、取り返した話。掛け詞の応酬が面白い。

上40段は、句点の打ち方を問題にした笑話。下京の目医者が暖簾に、「かねこめくすりや」と書いた。人々、金、米、薬の三品を売ると思って買いに行く。迷惑して「かねこめくすりや」と直した話。

下45段は、麴売りが金閨寺の塔頭を売りまわり、門外へ出る所を、門番の坊主が引きとめて「かうし（麴・好事）門を出す」と言う。麴売「そうはたゞく、けつかのもの」と言い、僧をぼんと叩いたという話、故事をふまえた機智あふれる対話に興味がある。上38段は、字尽しで、時衆の僧が禅宗の僧によく「きん」の字を使うと言って、きんのつくことばを並べると、禅宗の僧は時衆はよく「つ」の字を使うと言って「先、な無あみたふつおとつつはねつ、かねをたゞいつ、何やらしつ」と、時衆の僧の妻帯が自由になつてゐることを皮肉った話。字尽しの言語遊戯と共に、内容的にも面白い。

以上、言語遊戯による笑話を挙げたが、それぞれの話でもわかるように工夫されており、また、その内容は多岐にわたっている。和歌の項でも述べたことだが、機智に富む言語遊戯（時には、卑猥なものも入るのだが）も本書の笑いを支えている重要な要素の一つと言える。

以上、三節のユーモアのある笑話では、機智に富んだユーモアある行為や、言語遊戯などを積極的に賞讃する態度がみられる。一、二節の考察と総合すると、そこには健康で、明るく、解放的で、素朴で、大らかな人間像とその笑いが浮き上がってくる。本

能的・積極的・肯定的な笑いと言えるよう。

注1 「金沢大学語学・文学研究」創刊号 「きのふはけふの物語」の

「笑い」の発想について。

注2 小高敏郎氏「昨日は今日の物語」の諸本。（学習院大学文学部研究科報第12輯）。岡雅彦氏「昨日は今日の物語」成立考（野田寿

雄教授退官記念論集）。

注3 東京堂。昭和22年刊。

注4 角川選書61、昭和47年刊。

注5 柳田国男全集、第七巻。

付記

本稿は、金沢大学近世語研究会のメンバーと本書の索引を作成する一方、研究会を重ねていく中で問題となつたことの一部を整理したものである。

（昭和五十一年九月十六日受理）